



開学40周年特集

創立40周年にあたって

池田高良

(学長)

長崎県立大学は、昭和26年に創設された長崎県立佐世保商科短期大学やその後、統合改称により設置された長崎県立女子短期大学、長崎県立短期大学佐世保商英部を前身としております。そして、昭和42年（1967）に4年制大学へ昇格し設立されました長崎県立国際経済大学を長崎県立大学の創始として、今日までに学科増設、研究所、大学院の設置、

図書館情報センターの開設など教育・研究体制と組織の整備・充実を図って参りました。

長崎県立大学の建学の精神は、1. 積極、創造、パイオニア精神の涵養、2. 国際的識見と人格の陶冶、3. 理論と実践を融合した産業文化人の養成、の3つの柱からなり、40年に亘って、この精神に沿って教育・研究と地域貢献の充実と向上のために、教職員、学生一同が精進し、努力を重ねて参りました。この間、長崎県、佐世保市、同窓会、地元経済界、教育界など関係各位には多大のご支援を賜りました。お蔭様で、入学してくる学生も、卒業していく学生の資質も向上し、就職率95%以上、卒業生自身の満足度も、就職先での卒業生に対する評価も高くなっており

ます。

とはいえ、近年の少子化の進行にともなうて、入学試験の競争倍率は低下傾向が見え始めております。そして、今からは大学卒業時の学業到達度などの資質が問われる時代が変わって行きます。すなわち、知識偏重の時代から意欲、探究力、統合力、応用力に富んだ学生が求められる時代になってきたのです。

ここに改めて、創立時の建学の精神をしっかりとしめ、国際的な視野と見識を備え、さらに高度情報社会や多様な現代社会のニーズに応える人材を養成すべく努力を重ねる所存であります。そして、長崎県立大学は、地域に開かれ、地域と手をつなぎながら、地域とともに発展していくことが極めて重要であると考えております。

図書館の恩恵

石川 勝 治

(名誉教授・元図書館情報センター長)

県立大学にいました33年の間は、家から研究室に通い、教室と図書館に出向くのが、生活の基本でしたから、身近に図書館のあることの恩恵をしみじみと感じている昨今です。

開学から40年の間には、図書館も時代の要請に応じて大きく成長しました。初めは研究室、研究所と図書館は併設されていて（今の演習室のある建物）、その2、3階にうす暗い書庫があるだけで、閲覧室は狭かったでしょう。しかし私が昭和46年に赴任した時には、研究室の西の建物の3、4階に新しい図書館がすでに出ておりました（今の教室と音楽サークルの部屋）。閲覧室は広くなりましたが、ここでも本棚は閉架式でカードによる書物の探索方式は続いておりました。

平成の時代になって後援会から図書館に多額の補助をいただきましたので、文庫本と新

長崎県立大学は、平成20年4月1日に県立長崎シーボルト大学と統合致します。新しい長崎県立大学となりますが、歴史と伝統を受け継ぎながら、新しい大学として教育、研究の一層の充実と向上を図るべく、教職員、学生共々決意を新たにしたいと思います。そして、長崎県立大学の学章に表わされている「おとり」のように、国際社会で悠々と飛び、舞う大学でありたいと願っております。

創立40周年を迎えるに当たり、改めて今日まで長崎県立大学を育み、支えて下さった多くの方々に心より感謝申し上げますとともに、関係各位におかれましては、今後とも倍旧のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



昭和43年6月7日 開学式

書を数多く閲覧室の壁ぎわの書棚に並べる開架式にして、学生のみなさんに図書館に親しんでいただけるようにしました。そして全国の公立大学の図書館では市民への開放を始めましたので、長崎県立大学でも早い時期（平成3年頃）から県民のみなさんに2週間3冊まで本をお貸しするようになりました。

流通学科の開設により学生数が2倍になりますと、閲覧室が狭くなりましたし、書庫の収容能力も限界に達していました。こうして念願の図書館情報センターが平成8年9月に開館しましたことは、画期的なことでもあります。

図書館は単に書物を収集し、貸出すだけではなく、情報を発信する場所となりました。学生と県民が本に親しめるようにと書物はすべて開架式となり、広い閲覧室と個人学習室、研修室と地域学習室を備えた滞在型の図書館になっております。さらにITによる情報のグローバル化に対応して、センターから学外の図書館、研究機関と情報の交換ができるようになり・書籍の相互交換も可能になっております。このように多面的な施設と高度な機能を備えた図書館が身近にありますから、学生と県民のみなさんがセンターに通われて十分活用されますようにと念願しております。

私は近くに大学図書館がありませんので、定年後は自分の足でアクセスのできる愛知県の近隣にある市立図書館に通って、それぞれに特色のある地域コーナーの本を調べております。例えば安城市中央図書館には童話作家新美南吉、碧南市民図書館には明治時代の宗教哲学者清沢満之、豊田市中央図書館には江戸初期の禅仏教者鈴木正三などの全集と研究書が収集されています。特に西尾市立図書館、岩瀬文庫には8万余点の古書が収蔵されていますが、その中には長崎県と関係の深い江戸時代の思想家雨森芳洲の随筆『たはれ草』の原本や古いキリシタン文書もみられます。これは一例にすぎませんが、この文庫の古書に対していますと、日本文化の源流にふれる思いが湧いてきます。



開学祭入場門

私の見た 本学図書館の今昔

長島 弘

(地域政策学科教授・元図書情報センター長)

私が本学に赴任した1981年ころは今の図書情報センターの建物も研究棟もなく、そこはテニスコートや芝地であった。そのころの図書館は現在の旧図書館棟にあった。図書館棟の2階は教室で、図書館の閲覧室や書庫は3階と4階にあった。そのころの閲覧室は高校の図書室を少し大きくした程度だった。書庫は鉄扉の奥にあり、3層（3階建て）になっており、学生も一部を除き自由に入れた。ただし、館内閲覧のためには館内閲覧請求票と学生証を係員に提出しなければならず、学生の閲覧できる冊数は1回につき3冊までとなっていた。なお、当時の研究室は現在の大学院棟1、2階にあり、湿気のひどい狭い部屋で、図書館から借り出した図書がシロアリに喰われてしまった同僚さえいた。私は時々4階の「東南アジア・中国コーナー」（現在の「東アジアコーナー」）に行って、そこにあったマイクロフィルム・リーダー・プリンターを利用したが、湿式のプリンターでロール式の分厚いコピー用紙にプリントする、不便なものであった。

今日の図書情報センターがオープンしたのは1996年9月であるが、手狭になった図書館に代わる新図書館建設のプランが作成され始めたのは、流通学科の増設（1991年4月）前の1989年ごろからだだった。そして紆余曲折を経て、1993年度に近藤嘉昭図書館長のとときに、現在地に現在のような県民に開かれた図書館（学術情報交流センター、4階建て、3,500㎡、図書収蔵能力30万冊）を建設する案が県に認められた。（経緯は不明だが、面積は最終的に4,099㎡となっている）。その名称は最終的に学内の意向により「図書情



開学当時に学生が発行していた文芸誌

報センター」となった。新図書館は明るく、美しく、空調の効いた、居心地のよい「滞在型図書館」を目標とし、情報化と地域開放も図った快適なものとなった。当時の関係者の方々のご努力に敬意を表したい。マイクロフィルム室も新設され、現在、対馬の宗家文書のマイクロフィルムやオランダやイギリスの東インド会社文書のマイクロフィルム（一部分）も架蔵されている。

最後に図書情報センターの今後について。現在センターの図書収蔵能力が限界に来ている。私が図書館の運営に係わっていた2002年3月に手動式の集密書架（本学基準で収蔵冊数84,000冊）を導入したが、それもまもなく限界を迎える。この問題の一日も早い解決を期待したい。次に近年は講演会や映画会など図書館の多様な活用が試みられ、また図書館ツアーなど学生自身の図書館活用能力の育成が進められているが、学生や市民の質問

に答えるレファレンス・サービスの一層の充実も期待したい。いま本学で構想されつつある、地域の史資料についてのデータベースの構築もその延長上にあるものと考えてる。

図書館の思い出

小森郁子

(1975年経済学部経済学科卒・旧姓 吉居)

勤務時間中に突然携帯電話から聞こえた恩師の声。「図書館の思い出を書いてくれ。よろしく」エッ〜と引き受けたものの、確か図書館は中央研究棟にあったなど、当時のキャンパスと友人の顔を必死に思い出すような状態の私が記念誌の原稿を書いて良いものかと思いつみながら文章を書いています。

青春時代の4年間を過ごした「国経大」は、学生数も少なくこれから歴史を作っていくという草創期でした。（私の学年は200名のうち女子7名）

私が入学した1971年は、開学4年目の新しいキャンパスに、60年代安保闘争の名残の立て看板が並ぶ学生会館前で、アジテーションをしているヘルメット姿の先輩達をほとんどの学生が無関心に遠巻きに眺めている状態でした。日本経済はそろそろ高度成長の翳りが見え始め、私が卒業した1975年はオイルショックの影響で厳しい就職戦線に晒されようとするそんな時代でした。

当時の大学図書館は、交流サロンの様な今の図書館とは趣きも違い授業や先生方の専門研究のための情報収集の場だった様な気がします。どちらかというとな寄りかたい雰囲気であるのをためらう空間でした。専門書を扱う本屋は四ヶ町にしかなく、専門書を買うゆとりもない学生生活でしたので試験の前やゼミの課題の資料調べには利用していました。あまり広くない閲覧室に先輩がいると自分の居場所を確保するのも遠慮するくらい慎重やかな(?)女子大生でした。新しい大学でし

たが書庫に並ぶ書籍は意外と古く商科短大時代からの引継ぎだったのかセピア色の背表紙の本と古い紙の独特の匂いが記憶に残っています。カウンターで、調べたい内容やタイトルだけで探してもらった本の中身と自分の求める内容とのギャップに落胆したり意外と興味を持ったりとそんな楽しみもありました。時々、借りた本の中に栞代わりにチラシが入っていて裏にレポートの下書きらしき文章が書いてあったりすると誰かと知識を共有できた喜びと安堵感を味わって自己満足していました。



昭和42年竣工の(初代)図書館玄関
(現大学院棟)

これからの大学図書館は情報センターとして、学内だけでなく、地域との交流の場、町おこしや知識の宝庫として大きな役割を担っていられると思いますが、本に籠められた歴史や思いも一緒に伝えていただきたいと願っています。今は、インターネットで検索すれば読みたい本や情報が手に入る時代ですが、こんな時代だからこそ溢れる情報を自分自身の知識として吸収していくために、「書き手」「作り手」の思いの籠もった「本」を手にすることができる贅沢こそ幸せだと感じます。今回の寄稿で改めて学生時代を思い出すことができましたこと感謝しております。

図書情報センターの これからの想う

西尾 健

(1991年経済学部経済学科卒)

人は昨日の延長線上に今日が、今日の延長線上に明日があると無条件に思いがちだ。確かに時計やカレンダーの上ではそうだろう。だが人の営みから見ればどうか。今日の延長線上に明日を持つてくるには、その為の努力が不可欠となる。

長崎県立大学の図書情報センターはその前身である長崎県立国際経済大学の図書館時代から数えて40年の歴史を刻むという。40年前、いや筆者が平凡な学部生だった20年前に時代がここまで急変すると予測した人間は数少ない。

社会の情報化がここまで急展開する以前、私たちにとり可視化情報、特に可視化された知識とは主に書籍や新聞・雑誌といった活字印刷物を意味した。そして図書館はその知識を体系的に蓄積する場、即ち孤立したデータベースであり、少なくとも知的情報ネットワークの結節点としての役割は有していなかった。筆者の学生時代の本学図書館もまた同様に、孤立した、それも内容的にも不十分なデータベースの役割しか有していなかった。しかし大学自体が経済学部経済学科のみで学生



昭和44年竣工の(第2代)図書館受付
(現講義棟)

数も1,000人を満たない状況下、限られた予算や人員配置の中で図書館のスタッフの方々は精一杯の努力をされていた事も事実である。もっとも筆者も図書館の利用に関しては怠け者であり、大言壮語できないが。

視点を現代に移そう。今日、図書館に求められている役割は孤立したデータベースではない。従来の知識の集積拠点の役割以外に、知的情報ネットワークの結節点としての役割が強く求められている。情報はネットワークされることで静的存在から動的存在へ変化し、新たな付加価値を創造する。そして情報化社会においてより必要とされるのは動的存在としての情報である。孤立したデータベースは情報化社会にとって意味を成さない。図書館の持つ情報や機能を動的存在とし付加価値を創造させる為には、図書館を知的情報ネットワークの結節点として機能させることが重要だろう。

県立大学の図書情報センターが情報化に積極的に取り組み、地域社会に対して付加価値を創造しうる存在になれるのか、それとも情報化に背を向け単なる知識の収納場所に終わるのか。それは単に図書情報センターの問題に留まらない。それは今後、長崎県立大学が知的情報ネットワークの結節点として、特に地域社会に対する付加価値の創造拠点として機能しうるかという問題に直結する。

明日を手に入れる為には今日の努力が必要だ。図書情報センターは40周年を迎えたが、それはこれまで地道に努力してきた積み重ねが今日の図書情報センターの形に結実したのだと信じたい。そしてOBとして長崎県立大学図書情報センターが今後、積極的に情報化に努力され地域の付加価値創造拠点としての明日を手に入れることを切に願ってこの文章を終わりたい。駄文・乱文であり我ながら汗顔の至りだが、その点は平にご容赦願う。

1967年を振り返る

谷澤 毅

(流通・経営学科准教授)

1967年はどのような年であったか。本学が開学した頃を本や出版にまつわる話題を中心に振り返ってみよう。

古い新聞(朝日新聞)をひも解いてみると、この年の7月、佐世保は大水害に見舞われたらしい。ところがその後、今度は一転して水不足に見舞われてしまい、9月から11月にかけて大幅な給水制限が続く。この年、九州・山口の雨量は史上最低を記録したという。奇しくもその40年後、本稿執筆の時点で、佐世保は給水制限を目前に控えている。

水不足を何とか乗り切った佐世保は、1967年の年末から翌年初めにかけて、また新たな騒動に巻き込まれることになる。エンタープライズ佐世保入港が巻き起こした騒動である。寄港は翌年の1月だったとはいえ、前年12月ごろには佐世保、県北地区はすでに不穏な空気に包まれていたようだ。新聞には、原子力空母の寄港反対の請願が幾つかの議会で否決されたとの記事が散見される。放射能測定装置が取り付けられたとの記事も見つかった(12月28日)。また、国際経済大学(現県立大)の学生総会開催もニュースとなった(12月29日)。これは、エンタープライズ入港反対を叫ぶ全学連が佐世保に集結した際、国経大が占拠されるとのうわさがあるため、それを阻止するための総会であったという。

当時、少なからぬ数の学生、若者が政治的なメッセージを掲げ、機会を見つけては実力行使に突き進むケースが見られた。それは何もエンタープライズ入港反対闘争に限られなかった。しかも学生たちは、自分たちの行動を正当化する理論的、思想的な根拠をも追い求めていた。そのために思想面からの理論武装が図られ、多くの本が読まれていった。マ

ルクス主義を柱とする勉強会や読書会に参加する学生も、少なからずいたはずである。哲学・思想関係の文庫本をポケットに突っ込んでデモに向かう学生も多かったことだろう。無論、ノン・ポリといわれた学生も多かった。実際にはこちらのほうが大多数であっただろう。それでも、現在と比べれば哲学・思想に触れ、書籍を手にする機会は格段に多かったはずである。文学も骨のある古典を中心に教養小説を文庫本で読みながら、人生いかに生きるか、今のことばで言えば「自分探し」なるものの答えを追い求めていたのである。

その文庫本を例として、当時刊行された本の世界に触れてみよう。よく読まれた文庫としては、教養主義的色彩の濃い岩波文庫をはじめ、「文学の新潮」の名に恥じない新潮文庫の、現在の同文庫からはうかがうことのできない純文学の伽藍ともいえるシリーズなどがあったが、ここでは岩波文庫解説総目録から、1967年に刊行されたものを無作為に幾つか取り上げてみる。まず、世界文学の大作として、『アンナ・カレーニナ』、『ジャン・クリストフ』が刊行中であった。モンテーニュの『エッセー』も一部はこの年の出版である。やや専門的な大作としては、フレイザーの『金枝篇』やファーブルの『昆虫記』がある。こうした長編をじっくりと時間をかけて読むゆとりが現代にあるだろうか。デカルトの『方法序説』とヘーゲルの『哲学史序論』が岩波文庫から出たのも1967年であった。ヘーゲ

ルでは、この年『政治論文集』（10月上巻・12月下巻）も出版されている。岩波文庫の豊穡さを示す一例として、ブリアーサヴァランの『美味礼賛』を挙げておこう。一読すれば、グルメになるには広くて深い教養が必要なことがわかる。現代文学では、川端康成の『伊豆の踊り子』を含む小説集が3月に、『雪国』が翌1968年2月に刊行。これはよいタイミングであった。同年、川端はノーベル文学賞を受賞する。

ちなみに、岩波文庫からの『資本論』の刊行は、翌々年1969年からであり、この年の1月から9月にかけて第8分冊までが出ている。

2007年夏、岩波書店の雑誌『思想』は、第1000号の刊行を果たした。その記念号に、第1号から1000号までの総目次が掲載されている。これを利用して1967年1月号から12月号までの目次を一瞥すると、やはりというべきか、「マルクス」、「資本論」をタイトルに含む論考が多いことがわかる。全12冊の目次のうち、9冊の目次にマルクスは登場しているのだ。1967年第5号は、『資本論』と『帝国主義論』の特集号である。この特集号の執筆者がまたすごい。大内力、長洲一二、佐藤金三郎、平田清明、宇野弘蔵、梅本克己、杉原四郎などと続く。『思想』とはなんと贅沢な雑誌かと改めて感心させられる。マックス・ヴェーバーも頻繁に登場している。マルクスとヴェーバーの対比も目に付く。昭和40年代の前半、多くの人々は、なおも思想



学校全景



長崎県立国際経済大学建設予定地

が持つ可能性、力を信じていたのである。

なお、1967年とは、『資本論』第1巻出版100年、レーニン『帝国主義論』出版50年、ロシア革命50周年の記念すべき年であった。岩波新書からは、ドイツチャー『ロシア革命五十年』、向坂逸郎『資本論入門』が出ている。

岩波文化の世界を離れ、もう少し書籍の間口を広くしてみよう。再び当時の新聞に目を通してみると、今年（1967年）の文学回顧では、大江健三郎『万延元年のフットボール』が注目されている。マクルーハンがブームとなり、彼のメディア論とともにその紹介者の竹村健一もが知られるようになった。トインビーも来日したらしい。朝日新聞では、かの長編、大仏次郎の『天皇の世紀』が連載中であった。話題になった本といえばベストセラーであろう。だがこの年のベストセラーは、はっきり言ってつまらない。カッパブックスの『頭の体操』（多湖輝）第1集が第1位、第2集が第2位、第3集が第5位を占め、第3位

にようやく有吉佐和子『華岡青洲の妻』が入ったが、第4位は岩田一男『英単語記憶術』であった（東京出版販売発表）。今はやりの「脳トレ本」のはしりがよく売れた。特定の本に人気が集中してしまう傾向は、この頃にもあったのである。

広告を見ると、全集の大掛かりな売り込みが目につく。河出書房では『世界の大思想』、『世界の旅』。後者はレコードつき。まだ海外旅行が身近でなかった頃の企画である。大月書店では、『レーニン全集』全44巻が前渡し12ヶ月月賦セールで売られている。支払いを後にしてでもレーニンを読もうとする人がいたのだろう。明治100年を控えて『明治文化全集』（日本評論社）の広告もある。新潮社の広告からは、高橋和巳『我が心は石にあらず』、中央公論社からは、江上波夫『騎馬民族国家』を挙げておく。後者は、後に大きな論争を巻き起こすことになる。そのほか1967年の文学にまつわる話題として、日本近代文学館の開館があり、記念切手も発行された。内田百間の芸術院会員辞退は、百間らしい話題といえよう。

この年、直木賞は野坂昭如が受賞した（もう一人は生島治郎）。前年1966年には五木寛之が受賞している。野坂、五木ともにこの後流行作家として活躍していくが、二人には作詞家としての共通点もある。それもCMソングのである。二人とも、高度成長期に多くのコマーシャル・ソングの作詞を手がけてい



正門より学生並木通りを望む

た三木鶏郎率いる冗談工房に名を連ねていた。
 (『東京人』、2007年12月号、27ページ) イ
 デオロギーや思想が、まだ真正面から論じら
 れていたこの時代、一方では文学とマスコミ
 との交流が開かれ、本を通じて触れることの
 できる世界は広がりがつつあったのである。
 世界観を振りかざす四角四面の議論には当

然なじめないのだが、教養という言葉を持ち
 出すことさえはばかれる柔な時代からも逃
 げ出したいと思うことがある。昭和30年代
 にまで遡らなくとも、本学開学当初の多様性
 に満ちた時代も十分懐かしく感じられるのだ。
 私事ながら、1967年当時、5歳の筆者は「ウ
 ルトラセブン」に夢中であった。

図書館をとりまく出来事

S.26. 4. 1	「長崎県立佐世保商科短期大学」を開設
S.32. 4. 1	長崎県立女子短期大学と統合、「長崎県立短期大学佐世保商英部」と改称、英文科を増設
S.42. 4. 1	「長崎県立国際経済大学」開学(初代学長 本田實)、附属図書館設置(経済学部経済学科設置)
S.43. 4. 1	国際文化経済研究所設置
S.43. 6. 7	開学式
S.44. 9.26	附属図書館新築工事竣工(旧附属図書館は研究棟へ転用)
S.54. 1.	(共通一次試験元年)
S.62.11. 8	創立20周年記念式典
H. 2. 1.	(大学入試センター試験元年)
H. 3. 4. 1	「長崎県立大学」へ名称変更、流通学科を増設、経済学科定員増
H. 5. 4. 1	大学院経済学研究科(修士課程)開設
H. 8. 9. 1	附属図書館を廃止し、図書情報センターを新設
H. 8. 9.11	図書情報センター開館記念式典
H. 9.10.30	創立30周年記念式典
H.11. 4. 1	県立長崎シーボルト大学開学
H.17. 4. 1	長崎県立大学及び県立長崎シーボルト大学が長崎県公立大学法人へ移行(地方独立行政法人化) 県立長崎シーボルト大学、大学院人間健康科学研究科栄養科学専攻(博士後期課程)開設 長崎県立大学1学部3学科へ、地域政策学科を開設、流通学科を流通・経営学科へ名称変更
H.19.11.11	長崎県立大学、創立40周年記念式典
H.20. 4. 1	長崎県立大学と県立長崎シーボルト大学を統合し、「長崎県立大学」開学予定 学部は3学部7学科へ、経済学部(経済学科、地域政策学科、流通・経営学科) 国際情報学部(国際交流学科、情報メディア学科) 看護栄養学部(看護学科、栄養健康学科) 大学院は3研究科5専攻へ、経済学研究科(産業経済・経済開発専攻) 国際情報学研究科(国際交流学専攻、情報メディア学専攻) 人間健康科学研究科(看護学専攻、栄養科学専攻)

昭和42年開校当時の講義科目一覧

系 列	学 科 目	単 位 数	担 当
人文科学系	歴 史	4	立 花 教 授
	心 理 学	4	中 村 助 教 授
社会学系	法 学	4	広 井 講 師
	政 治 学	4	近 藤 講 師
	経 済 学	4	河 野 助 教 授
自然科学系	数 学	4	新 井 教 授 森 教 授 井 上 教 授
	物 理 学	4	新 井 教 授
第一外国語科目	英 語 I	6	中 里 助 教 授 佐 藤 助 教 授 梅 田 講 師
第二外国語科目	ド イ ツ 語 I	4	立 花 教 授
	フ ラ ン ス 語 I	4	高 浜 助 教 授
	中 国 語 I	4	大 石 教 授
	ス ペ イ ン 語 I	4	園 田 講 師
専門教育課程	貿 易 論	4	本 田 教 授
	一 般 経 済 史	4	関 山 教 授
	会 計 学	4	伊 崎 講 師
	経 済 学 史	4	丸 山 講 師
	近 代 経 済 学	4	河 野 助 教 授
一般演習科目	法 学 演 習	2	広 井 講 師
	合 計 学 演 習	2	伊 崎 講 師
	経 済 学 史 演 習	2	丸 山 講 師

出典:長崎県立国際経済大学『講義要綱』(昭和42年度)より

公立大学図書館を取り巻く状況と 本学の課題(2)

山田 千香子

(図書情報センター長)

大学図書館の役割は単に学術情報を提供するだけではない。利用者に対して的確で信頼性が高い有用な学術情報や情報源を、適切と考えられるやり方で提供することを基本姿勢としている。現在、大学図書館の基本的な役割として、電子化(デジタル化)の急激な進展に伴う「電子情報と紙媒体を有機的に結びつけた、新たな意味でのハイブリッド・ライブラリー」の実現が求められている。利用者の観点に立てば、伝統的な紙媒体の資料世界と電子情報源の資料世界の双方から学習や研究を進めることになる。時と場合によって相互補完的に両者を使いこなし併用するハイブリッドな利用法が利用者としての課題である。

インターネットやウェブの普及と学術情報・資料のデジタル化の波は、どのような電子資料を大学のどこで、だれが、どのように蓄積するか、というデジタル・アーカイビングの問題について各大学に緊急な対応を求めている。それだけではなくデジタル化の波は印刷媒体の単純な置き換えにとどまらず、さまざまな文脈から多くのサービス形態を生んだ。電子ジャーナル、シラバス、各種データベース、機関リポジトリ、デジタルレファレンス、図書館ポータル、オープンコースウェア(OCW)等である。多様な電子情報源を図書館としていかにサービスしていくかという課題とともに、新しいサービスモデルの構築が必要となっている。

今回は、上記の中から本学でも取り組み始めている教育研究の活性化や学術情報の流通促進のための「機関リポジトリ」について紹介させて頂きたい。学術機関リポジトリ(Institutional Repository)とは「大学とその構成員が創造したデジタル資料の管理や発信を行うために、大学がそのコミュニティ構

成員に提供する一連のサービス」と定義される。大学および研究機関で生産された電子的な知的生産物を捕捉し、保存し、原則的に無償で発信するためのインターネット上の保存書庫である。コンテンツとしては、学術雑誌掲載論文、灰色文献^{注1}、学位論文、教材などが考えられる。本学ではさらに地域貢献のためのコンテンツ蓄積を試験的に試みており、リポジトリの定義としては幅広く捉えて位置づけている。また、学術機関リポジトリの存在意義としては、以下の点を挙げるができる^{注2}。大学の研究教育成果に対する視認性とアクセシビリティの向上、社会に対する大学の研究教育活動の説明責任の保証、大学で生み出された知的生産物の長期保存、商業出版社が独占する現行の学術出版システムに対する代替システム等である。

最後に本学の課題を「新しいサービスモデルの構築」としてまとめるならば、上記のように多様な電子情報源を提供できる情報基盤の強化(収蔵モデルとしてのハイブリッド・ライブラリー)が挙げられる。それとともに図書館の持つ教育機能を高め、利用者である「学生の学習支援」としてのサービス提供(利用モデル)である。まず、学生たちのニーズを把握し利便性を高めていくことが必要とされる。さらには、情報リテラシー教育支援という視点であり、学生がハイブリッドな利用法ができるための支援が重要である。図書館の利用の仕方や資料データベースに関する利用手引きについては「図書文献検索ツアー」として新入生ゼミ、専門ゼミ対象に既に実施しているが、一段と求められるのは教員や各種の教育プログラムとの連携を図り、情報の中身(情報の利用・その評価・提示等)に関わる「現場からの」教育支援と考えられる。

注1 プレプリント、ワーキングペーパー、テクニカルペーパー、会議発表論文、紀要、技術文書、調査報告等。

注2 「電子図書館の新たな潮流21」
http://mitizane.ll.chiba-u.jp/curator/about/dlnext_IR.pdf

本との出会い

王 欣 榮

(中国語特任講師)

国では日本語を教えているので日本語の本をわりと読む。日本に来たら、日本の本をもっとたくさん読むだろうと思われるが、私の場合中国語を教えに来るので、逆に中国語関係或いは中国語に関する教科書や雑誌などに触れることが多い。

私の研究室の近くに立ち読みコーナーがある。その中の二つの本棚に中国に関する本がぎっしり入っている。《人民中国》という中国を紹介する雑誌以外の、中国語の教科書類、学生のための優しい中国語の読み物などもある。立ち読みコーナーだから、そこに立ってすこし読むことにした。外側のものから内側に置いてある本へと順番に一通り見たら、驚いたことに、プロ文化大革命のときに出版された小説などがいっぱいあった。現在中国人の家にはこのような小説が置いてあるかどうかかわからないのに、ここにこんなにあるとはとにかく驚きであった。私はプロ文化大革命時代の本を読みながら育ったものだから、こういった小説を見てとても懐かしかった。その中の《柔石選集》という緑色の本が私の注意を引いた。まさかここにこんな本があるとは夢にも思っていなかったのである。

さっそくこの本を手にとりて見た。これは香港の港青出版社1978年11月出版のものだ。本の序文として魯迅が書いた「柔石小傳」、「為了忘卻的記念」、「二月小引」、柔石の息子が書いた「我的父親」がある。この本には柔石の代表作『為奴隸的母親』、『二月』が収録されている。中学校の時には魯迅の「為了忘卻的記念」を読んだことがある。それで、いつかは柔石の『為奴隸的母親』を読みたいと思っていた。その後いろいろとほかの本を読んだりしているうちに、いつのまにかこの

ことを忘れてしまっていた。それが思いがけなくここで見つかったのである。

『為奴隸的母親』に書いてあるのは中華民国の話である。主人公は阿秀という田舎の女性である。その息子春宝は病気にかかりなかなか治らず、その上、夫は借金を返すことができない。その地方には古くから妻を後継者のない金持ちの家に貸してその家のために後継者を生まれ、金をもらう風習がある。そこで、夫は阿秀をある秀才の家に三年間貸した。阿秀は三歳になったばかりの息子春宝と離れ離れになって、三年間の間に秀才のために男の子を生まなければならなかった。阿秀は下女として働きながら、泣き声が耳にこびりついて片時もはなれない日はないというほどに春宝のことを心配して辛い日々を送っていた。八ヵ月後阿秀は妊娠して、その日から待遇もよくなった。そして、秋に男の子秋宝が生まれた。子供が生まれてから、阿秀はまた下女のようにこき使われ、侮辱された。ようやく三年間の契約がおわり、心配している春宝の元へ帰ることができたが、春宝はもう阿秀のことをすっかり忘れてしまって彼女をぼうと眺めていた。

話はここで終わっている。阿秀は二子とも失うはめになった。これは今から80年近く前の1930年代の作品である。女性は一人の独立した人間ではなく、ただ生殖のための存在であるという極めて性差別的な考え方の濃い昔の中国での話である。

山田先生の文化人類学の授業で家族、性差別について勉強した。この小説を通して一昔前の中国の女性の生活実態が理解できる。皆さんも一読する価値があるのではないかと思います。



中国語インテンシブコースは高度なコミュニケーション能力の養成を目指して設置された本学独自の中国語コースです。当コースではこの目標を達成するために作文を重視しています。この二人の三年生は一期生です。

我与书

篠原奈々

(汉语集中班三年级)

世界上一百二十个国家中，我最喜欢的是埃及。因为我小学生的时候读过一本关于埃及的书。那是一本小说，小说的名字我已经想不起来了，只记得书中写的是古代埃及的事情。

我很喜欢那本书。我记得，那时候我常常看着看着那本书，脑海中就浮现出埃及沙漠的风景。比如：沙漠，金字塔，狮身人面像，尼罗河，纸莎草纸，象形文字，罗塞塔石等等。从那时候起我就向往着有一天去埃及看看。

我从来没有去过埃及，但是小说带我游历了这些美丽的地方，于是每当说到去外国，我就会想到埃及。我想，有一天我一定要去开罗博物馆，亚历山大，吉萨，曼菲斯，沙漠绿洲，路克索神庙，帝王谷等地方。我要走一走埃及，我要亲身感受埃及悠久的历史。

然而，非常遗憾的是，直到现在，我还没有实现这个梦想。通过读这本小说，让我对读书产生了极大的兴趣。从那以后，我特别喜欢看书。但是上大学以后，学习特别忙，经常没有时间看小说。所以，只要有一点时间，我就想看书。

我想看更多的书。

(要約)

私と本

篠原奈々

(中国語インテンシブコース 三年生)

世界120カ国の中で、私が一番好きな国はエジプトです。なぜなら、小学生のときにエ

ジプトに関する一冊の本を読んだからです。

私はこの本がとても好きで、その本を読むたびに脳裏にエジプトの風景が広がります。その時からいつかはエジプトへ行きたいと思っています。

まだエジプトへ行ったことがありませんが、小説を読むことでエジプトへ旅行へ行った気持ちになります。いつかエジプトを自分の足で歩いて、エジプトの悠久の歴史を身をもって感じたいです。

この小説を通して、私は本を読むことが好きになりました。なぜなら本を読むことで、自分の想像力をかきたてることができるからです。

だから、これからもっとたくさんの本を読みたいと思っています。

我与中国饺子

嵩美里

(汉语集中班三年级)

我学汉语快三年了，但是水平还很低。我觉得汉语很难，尤其发音非常难，最难的四声的区别。

大二的春假，我跟中国留学生、韩国留学生还有我的朋友们一起去中国玩儿了十五天。我们去了上海、乌镇、杭州、厦门、泉州、武夷山等地。从早到晚游览旅游胜地，体验中国文化和风俗习惯。那是我第一次海外旅行，我经历了很多以前没有经历过的事，其中，也有很多不习惯的事情，正如我们常说的百闻不如一见一样。我读过的一本中文教科书上写的饺子的事就是一个很好的例子。

大一时，中文教科书上有一段关于饺子的对话，老师在讲饺子的时候说：“中国的饺子和日本的饺子是不一样的。日本的饺子皮儿太薄，不好吃”。因此，我对中国的饺子非常感兴趣。

这次旅行中我也有饭菜不合口，为吃饭而操心的时候。每当这时候，我就吃饺子，在哪

里吃的饺子都好吃。中国的饺子确实很好吃。我稍微明白了老师说的话，亲身感受了教科书上写的事。

这次旅行很有意义。通过这次旅行我体验了很多事情。我会更加用功，学好汉语。

(要約)

私と中国ギョーザ

嵩 美里

(中国語インテンシブコース 三年生)

私は中国語を学んでからもうすぐ三年になります。しかし中国語は難しく、まだレベルは低いです。

大学二年生の春休みに私は中国人留学生と韓国人留学生それに友達と中国に旅行した。

上海、烏鎮、杭州、アモイ、泉州、武夷山などに行った。百聞は一見にしかず、というように朝から晩まで今までに見たことのないことなど沢山の風俗習慣を見、経験した。教科書で学んだギョーザもひとつの例である。

教科書には「中国のギョーザと日本のギョーザは違う。日本のギョーザは皮が薄くて美味しくない。」とあったので、中国のギョーザにとっても興味があった。

この旅行では私は食べ物に口に合わず苦労をしていた。しかしギョーザはどこで食べても美味しかった。教科書に書いてあったことを身をもって体験したのである。この旅行はとっておもしろく、ギョーザ以外にも多くのことを体験した。

図書情報センターからのInformation

選書ツアー選定図書



前号で紹介した「選書ツアー」の選定図書は、3階検索台横に配架しています。話題の小説・画集・マナーの本など、さまざまな分野の図書を約380冊取り揃えています。ぜひご利用下さい。

- ◆ 図書情報センターHPアドレス <http://www.nagasakiu.ac.jp/institution/lib/index.php>
 - 当センターは本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
 - 開館時間／平 日：午前9時～午後9時まで（学生の休業期間中は午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日

図書情報センターからのお願い

- 開館中の図書の返却は、2階受付カウンターにお願いします。
ブックポストへの返却は、閉館後の夜間、及び休館日の返却にご利用下さい。
- 返却をおこたると、他の人に大変迷惑をかけるだけでなく、返却が遅れた日数、貸出停止となります。また、図書館資料への書き込みはしないで下さい。気持ち良く資料を利用するため、皆様のご協力をお願いします。

編集責任／長崎県立大学取書委員会 発行所／長崎県立大学図書情報センター 発行日／2008年1月31日